現代日本語における形容詞と名詞とのくみあわせに関する記述的研究

关于现代日语形容词与名词组合的描写研究

毕晓燕◎著

知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

現代日本語における形容詞と名詞とのくみあわせに関する記述的研究

关于现代日语形容词与名词组合的描写研究

毕晓燕◎著

知识产权出版社
全国百佳图书出版单位

内容提要

该书是第一部以词组学理论为理论基础，对现代日语中形容词与名词的组合进行系统性描写的学术专著。不仅考察了日语中“A+N”这类结构简单的组合，而且考察了“(N1+A)+N2”这类结构复杂的组合。本书根据形容词与名词组合的结构特点，详细论述和考察了日语形容词与名词组合的语义关系、结构特征。在此基础上，抽象概括出了日语形容词与名词之间的语义关系类型，并且明确了日语形容词与名词组合中最主要的语义类型。

责任编辑：冯　彤　　**责任出版：**刘译文

图书在版编目（CIP）数据

关于现代日语形容词与名词组合的描写研究：日文/毕晓燕著.—北京：知识产权出版社，2013.11

ISBN 978-7-5130-2459-4

Ⅰ.①关… Ⅱ.①毕… Ⅲ.①日语—形容词—研究—②日语—名词—研究 Ⅳ.①H364.2

中国版本图书馆CIP数据核字（2013）第283130号

安徽大学图书馆 藏书

关于现代日语形容词与名词组合的描写研究

現代日本語における形容詞と名詞とのくみあわせに関する記述的研究

GUANYU XIANDAI RIYU XINGRONGCI YU MINGCI ZUHE DE MIAOXIEYANJIU

毕晓燕　著

出版发行：知识产权出版社

社　　址	北京市海淀区马甸南村1号	邮　　编	100088
网　　址	http://www.ipph.cn	邮　　箱	bjb@cnipr.com
发行电话	010-82000860转8101/8102	传　　真	010-82005070/82000893
责编电话	010-82000860转8386	责编邮箱	fengtong@cnipr.com
印　　刷	知识产权出版社电子制印中心	经　　销	新华书店及相关销售网点
开　　本	787mm×1092mm　1/16	印　　张	14.75
版　　次	2013年12月第1版	印　　次	2013年12月第1次印刷
字　　数	204千字	定　　价	45.00元

ISBN 978-7-5130-2459-4

出版权专有　侵权必究

如有印装质量问题，本社负责调换。

目　次

第1章　はじめに …… (1)
1.1　本研究の目的 …… (1)
1.2　先行研究に関する概観 …… (2)
第2章　本研究の枠組み …… (16)
2.1　形容詞の認定に関して …… (16)
2.2　資料と凡例の説明 …… (19)
2.3　本研究の用語 …… (20)
2.4　本研究の立場 …… (22)
2.5　本研究の記述方法及び構成 …… (33)
第3章　特性規定のむすびつき …… (41)
3.1　「対象側」か「主体側」か …… (41)
3.2　対象側からの特性規定のむすびつき …… (47)
3.3　主体側からの特性規定のむすびつき …… (120)
3.4　本章のまとめ …… (136)
第4章　状態規定のむすびつき …… (138)
4.1　「状態」と「特性」 …… (138)
4.2　人の外在的状態規定のむすびつき …… (145)
4.3　人の内在的状態規定のむすびつき …… (146)
4.4　人の社会的状態規定のむすびつき …… (154)
4.5　本章のまとめ …… (154)
第5章　状況規定のむすびつき …… (156)
5.1　「特性規定」「状態規定」と「状況規定」の異同 …… (156)
5.2　物の状況規定のむすびつき …… (159)

5.3　人の状況規定のむすびつき ……(162)
5.4　事の状況規定のむすびつき ……(165)
5.5　本章のまとめ ……(175)
第6章　関係規定のむすびつき ……(177)
6.1　関係規定のむすびつきとは ……(177)
6.2　物の関係規定のむすびつき ……(179)
6.3　人の関係規定のむすびつき ……(184)
6.4　事の関係規定のむすびつき ……(187)
6.5　本章のまとめ ……(191)
第7章　内容規定のむすびつき ……(193)
7.1　「内容規定」とは何か ……(193)
7.2　「内容規定のむすびつき」の下位区分 ……(196)
7.3　本章のまとめ ……(198)
第8章　特殊化のむすびつき ……(199)
8.1　特殊化のむすびつきとは ……(199)
8.2　「特殊化のむすびつき」の下位区分 ……(205)
8.3　本章のまとめ ……(211)
第9章　おわりに ……(212)
9.1　研究内容のまとめ ……(212)
9.2　本研究の意義 ……(215)
9.3　今後の課題と展望 ……(217)
出典一覧 ……(219)
参考文献 ……(223)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第1章
はじめに

1.1　本研究の目的

本研究は、大量の実例に基づき、従来の研究で触れられることの少なかった、現代日本語における形容詞と名詞とのくみあわせをめぐって、連語論的アプローチにより体系的に記述しようとするものである。本研究の目的は、下記のようにまとめられる。

①形容詞と名詞との意味的関係の違いにより、形容詞と名詞とのくみあわせに実現されるむすびつきをタイプ分けし、一般化する。それぞれのむすびつきをきめ細かく分析・記述すると同時に、その間の異同を明らかにする。

②各むすびつきを実現させる連語の形容詞と名詞のカテゴリカルな意味特徴及び各むすびつきを実現させる連語の構造的な違いを明確にする。特に「（N1＋A）＋N2」三単語による連語における従属名詞N1、主導・従属形容詞A、主導名詞N2三者の間に存在する意味的なかかわりあいを明らかにする。

1.2　先行研究に関する概観

1.2.1　現代日本語における連語論研究

1.2.1.1　連語とは

従来の日本語文法研究で言われる「連語❶」とは異なり、鈴木（2010）で述べているように、「連語論の対象とする連語は、一定の『名付け的な意味』を実現させている単語のくみあわせのことである」。（p. 4）「単語のくみあわせ」における「単語」とは実質的な意味を持つ単語でなければならない。言いかえれば、連語論における連語とは、二つ或いは二つ以上の実質的な意味を持つ単語が組合わさり、現実世界に存在する一断片を名付ける言語単位のことである。

二つ或いは二つ以上の単語が組合わさり、「陳述的なむすびつきB（predicative）」「従属的なむすびつき（subordinative）」「並列的なむすびつき（coordinative）」という三つのタイプのむすびつきを実現させるが、日本語連語論においては、「従属的なむすびつき」を実現させる単語と単語とのくみあわせのみが連語とみとめられている。❸

---

❶　従来の日本語文法研究で取り上げられる「連語」と連語論研究で取り上げられる「連語」との違いに関しては、鈴木（1994）と彭（2004a）を参照されたい。

❷　「むすびつき」とは、後述のように、連語を構成する単語間の意味的な関係を指す。

❸　言語学研究会（1983）の「編集にあたって」を参照されたい。「陳述的なむすびつき」と「従属的なむすびつき」と「並列的なむすびつき」を皆連語と見なす見解もあるが、奥田氏は、ロシアの言語学者ヴェ・ヴェ・ヴィのグラードフと同様な立場をとり、「従属的なむすびつき」のみを連語と見なす。具体的に言うと、「Nヲ／ニ…＋V／A」「A＋N」「N＋N」「V＋N」のような従属的な関係にある単語と単語のくみあわせは名付け的な意味を実現させ、文を構成する要素として存在することができる。例えば、「きれいな娘」というくみあわせは、「きれいな娘がきた。」「彼女はきれいな娘だ。」「ぼくはきれいな娘にであった。」のように、構成要素として文に組みこまれる際、主語の位置にも、述語の位置にも、対象語の位置にも来ることができる。つまり、「きれいな娘」というくみあわせは単語と同様に機能することができ、陳述性を有していない。それに対し、「Nガ＋V／A」のようなガ格の名詞と動詞／形容詞とのくみあわせの場合は、文の構成要素としてではなく、陳述的な意味が含まれている。氏は「彼女は美人だ」という例をあげて説明されているが、決してそうであるかどうか疑問に思われる。氏は「彼女は美人だ」というくみあわせは「彼女は美人だった」、「彼女は美人だろう」とそれぞれ時間性とモダリティーにおいて対立するとし、「彼女は美人だ」というくみあわせは時間性とモダリティーから切り離すことができず、陳述性を帯びていると述べている。しかし、「彼女は美人だ」というくみあわせには陳述性を帯びていると認められても、周（2008b）においても言及しているように、「くるみをわる」というくみあわせも「くるみをわった」「くるみをわるだろう」と時間性とモダリティーにおいて対立関係が成立する。ということは、従属的な関係にある単語と単語とのくみあわせも陳述性を帯びることになると認めざるを得なくなる。したがって、ガ格の名詞と動詞／形容詞とのくみあわせを連語論の研究対象から除外することの正当性は疑う余地がある。その点に関しては、すでに鈴木（1983）、彭（2004a）は異議を唱えている。両氏は「汚水が流れる」「電車が動く」のようなガ格の名詞と動詞とのくみあわせは「くるみをわる」のようなくみあわせと同じく、名付け的な意味を実現させることができ、連語として扱ってもよいと主張している。そして、周（2008b）では、既にガ格を取る名詞を考察対象に入れて初めての試みをした。本研究は、鈴木（1983）、彭（2004a）に従い、「N1ガ＋A＋N2」のようなガ格の名詞を含む連語も取り扱う対象とする。

1.2.1.2　連語論の研究対象及び位置づけ

周知のように、文法論には単語の文法的な側面及び活用語の語形を扱う形態論と、文の文法的な側面を扱う文論（狭い意味での構文論）がある。つまり、形態論は単語という言語単位を研究対象とし、文論は文という言語単位を研究対象とする。

形態論と文論とは違い、連語論は名付け的な意味を持つ実質的な単語と単語とのくみあわせ（＝連語）を研究対象とする。具体的に言うと、連語論は、連語を構成する単語の語彙的な面と文法的な面を重視し、同一の連語構造のもとに実現される単語間（＝主導語と従属語との間）のむすびつき（＝意味的な関係）をタイプに一般化することを任務とする研究分野である。

文法論｛形態論／構文論｛連語論／文論｝｝ ⟹ 文法論｛形態論（単語を対象に）／連語論（連語を対象に）／文論（文を対象に）｝

【図1❶】

図1の左側のように、従来、連語論は文論とともに構文論の下位分類として扱われたが、図1の右側のように、彭（2004a）は形態論、連語論、文論はそれぞれ単語～連語～文という異なるレベルの言語単位を研究対象とする分野なので、三者とも文法論の下位区分として位置付けることができるとし、連語論の位置づけを見直した。本研究は、彭（2004a）の立場に従い、連語論を文法論の下位区分の一つとして位置付ける。

1.2.1.3　むすびつきとは

連語論は単語と単語とのくみあわせに実現されるむすびつきを一般化することを目的とする分野であるが、むすびつきとは何か、または単語間のむすびつきはどのように実現されるのかについてまず確認しておかなければならない。

連語のむすびつきに関しては、言語学研究会（1983）と鈴木（2001）

❶　彭（2004a）による。

には以下のような規定が見られる。

> 連語論的なむすびつきというのは、かざられ❶の語彙的な意味をかざりがいっそう具体化してみせるという関係である。（言語学研究会1983：11）
>
> 連語論は、単語と単語とのくみあわせにみられるルールを研究対象とするのだが、単語と単語とのくみあわせにみられるルールは、単語のむすびつきとして一般化される。そのような単語のむすびつきは、それぞれ、構造的なタイプとして客観的に存在している。（鈴木2001：35）

上記の規定は以下のようにまとめることができる。つまり、連語論におけるむすびつきとは、同じ構造的なタイプのもとに実現される単語と単語との意味的な関係のことを指す。

そして、連語論で扱うむすびつきは、一々の連語に実現される意味的な関係ではなく、同じ構造的なタイプの連語のもとに一般化した、共通なむすびつきである。

下記の例を見られたい。

ちゃわんをわる	上衣に名ふだをつける
ガラスをくだく	かたにタオルをかける
ごまをつぶす	かべにポスターをはる

（奥田1983a）

❶ 既述のようにこれまでの日本語連語論では、従属的な関係にある単語と単語とのくみあわせのみは連語と見なされてきたが、他の語に従属するほうは「かざり」、他の語を従属させるほうは「かざられ」と名付けられていたが、後述するように、彭（2004a）は、「かざり」と「かざられ」という名付けは不適切であるとし、そのかわりに「従属語」と「主導語」という新しい名をつけた。本研究では、「従属語」と「主導語」を使用する。

「わる／くだく／つぶす」といった動詞は「ちゃわん／ガラス／ごま」といった物名詞を「ヲ格」の形で従属させるが、「つける／かける／はる」といった動詞は、「名ふだ／タオル／ポスター」といった物名詞と「上衣／かた／かべ」といった物名詞をそれぞれ「ヲ格」と「ニ格」の形で従属させる。両タイプの動詞と名詞との意味関係は同じではない。奥田（1983a）は、左側にある動詞と名詞との意味関係を「もようがえのむすびつき」、右側にある動詞と名詞との意味関係を「とりつけのむすびつき」と呼んでいる。

左側にある連語の動詞は、その動作が、「ちゃわん／ガラス／ごま」というものに働きかけ、それらのもののかたち・ありかたに変化を引き起こす。それに対し、右側にある連語の動詞は、その動作が、「名ふだ／タオル／ポスター」というもののかたち・ありかたに変化を与えるのではなく、その動作の働きかけにより、「名ふだ／タオル／ポスター」（第一の対象）というものは、「上衣／かた／かべ」（第二の対象）によって指し示される場所にくっつけられる。

奥田（1983a）は、「わる／くだく／つぶす」のような動詞を「もようがえ動詞」、「つける／かける／はる」のような動詞を「とりつけ動詞」と名付けている。「もようがえ動詞」は、物に働きかけ、それに何らかの変化を引き起こす意味特徴を持ち、「ヲ格の物名詞＋もようがえ動詞」という構造を作るちからを有しているが、「とりつけ動詞」は第一の対象を第二の対象にくっつけるという意味特徴を持ち、「ニ格の物名詞＋ヲ格の物名詞＋とりつけ動詞」という構造を作るちからを持っている。

上記の例における両タイプの連語の構造的なタイプとむすびつきは下記の表のように示すことができる。

【表1】

用　例	構造的なタイプ	むすびつき
くるみをわる 角砂糖をくだく あずきをつぶす	ヲ格の物名詞＋もようがえ動詞	もようがえのむすびつき
上衣に名ふだをつける かたにタオルをかける かべにポスターをはる	ニ格の物名詞＋ヲ格の物名詞＋とりつけ動詞	とりつけのむすびつき

1.2.1.4　連語論における用語

実質的な意味を持つ単語は他の実質的な意味を持つ単語と従属的に組合わさることにより、自分自身の意味が具体化される。他の単語を従え、意味が具体化されるほうが連語の核であり、連語において語彙的にも文法的にも主導的な役割を果たすが、他の単語に従い、その意味を具体化させるほうが従属的な要素である。

従来の連語論研究では他の単語を従え、核となる単語は「カザラレ」、他の単語に従い、従属的な単語は「カザリ」と名付けられていたが、彭（2004a）は、「カザラレ」と「カザリ」という名付けが適切ではないと主張し、それとひきかえに、「主導語」「従属語」という用語に改めた。

その理由については、氏は次のように説明している。「（前略）それぞれ《カザリ》と《カザラレ》という名付けを与えてしまうと、あたかも後者（＝カザラレ）が受動的な立場にあり、前者（＝カザリ）は、主導的な立場にあるように受け取られてしまう[1]」。（彭 2004a:9）つまり、「カザラレ」と「カザリ」という名付けは、連語の構成要素の役割を正確に反映しておらず、「主導語」「従属語」のほうが連語を構成する各要素の位置づけ及びその間の構造的、意味的相互関係が忠実に反映していて、一目瞭然である。本研究は、彭（2004a）に従い、「主導語」と「従属語」という用語を使用することとする。

---

[1] 連語論の用語の問題に関しては、彭（2004a）を参照されたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1.2.1.5 これまでの研究成果

日本における連語論研究は奥田靖雄氏・鈴木康之氏を先駆者として1950年代から始まり、その後数多くの研究論文や著書が出され、今日の連語論が構築されてきた。これまでの日本語連語論研究を眺めてみると、名詞と動詞とのくみあわせ、副詞と動詞とのくみあわせ、名詞と形容詞とのくみあわせ、名詞と名詞とのくみあわせ、動詞と名詞とのくみあわせに関しては、緻密な分析がなされており、大きな研究成果があげられていることがわかる。

・名詞と動詞とのくみあわせ
　を格の名詞と動詞とのくみあわせ（奥田　1983a）
　を格のかたちをとる名詞と名詞とのくみあわせ（奥田　1983b）
　に格の名詞と動詞とのくみあわせ（奥田　1983c）
　で格の名詞と動詞とのくみあわせ（奥田　1983d）
　へ格の名詞と動詞のくみあわせ（渡辺友左　1983）
　カラ格の名詞と動詞とのくみあわせ（渡辺義夫　1983）
　から格の名詞と動詞とのくみあわせ（荒　1983a）
　まで格の名詞と動詞とのくみあわせ（荒　1983b）
　ト格の名詞と動詞とのくみあわせ（彭2002）
・副詞と動詞とのくみあわせ（新川1979）
・名詞と形容詞とのくみあわせ
　ニ格の名詞と形容詞とのくみあわせ（松本1979；2006）
　名詞と形容詞とのくみあわせ（周2008b）
　名詞と名詞とのくみあわせ
　ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（鈴木1978～1979；2006、中野2004）
　カラノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（彭1993）
　トノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（彭1995）

デノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（彭1996b）
マデノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（彭1998a）
ヘノ格の名詞と名詞とのくみあわせ（彭1998b）
複合連体格の名詞と名詞（彭1999）

・動詞と名詞とのくみあわせ[1]（高橋1979；1994）
・形容詞と名詞とのくみあわせ（宮島1995）

宮島（1995）は形容詞と名詞とのくみあわせに関して考察・分析を行ったが、後述するように、宮島（1995）は、必ずしも形容詞と名詞とのくみあわせにおけるむすびつき方＝意味的関係を全面的かつ体系的に記述したとは言えない。

1.2.2　現代日本語の形容詞に関する研究

現代日本語の形容詞に関する研究は、動詞に関する研究に比べ、それほど盛んではないが、数多くの研究成果が残されている。それらの研究を一々挙げるには余裕が無いので、ここではそれら多くの研究のうち、本研究を進めるにあたって大きく関わっている点について、以下の2点にしぼって簡単に紹介するにとどめる。

1.2.2.1　形容詞述語文に関する研究

日本語の形容詞述語文に関する研究を概観する前に、まず日本語の形容詞の分類に関する研究に言及しなければならない。

形容詞の分類に関しては、時間順に挙げると、まず時枝（1950）、小山（1966）、西尾（1972）、寺村（1982）が挙げられるが、これらの分類は、いずれも形容詞の意味的な特徴と構文的な違いに基づき、日本語の形容詞を「属性形容詞」と「感情・感覚形容詞」（場合によっては「属性形容詞」と「感情・感覚形容詞」の中間的なものも認められる）に分けた点にお

[1] 高橋（1979；1994）は、厳密にいえば、連語論とはやや異質なものであるが、動詞句と名詞との意味的関係を体系的に記述したものとして一応ここに入れておく。

いては共通している。後ほど言及する荒(1989)、樋口(1996)、八亀(2001)は従来の分類基準とは別に、時間的な概念を導入し、日本語の形容詞を、「質形容詞」と「状態形容詞」に分類することで、新しい視点を導入して見せた。

形容詞の分類に関連して、形容詞の下位分類の一つである「感情形容詞」の述語文をめぐって、多くの研究が蓄積されているが、主として統語上、構文上の特徴、いわゆる人称制限をめぐる議論である。代表的なものとしては、西尾(1972)、寺村(1973)、仁田(1980)、金水(1989)、神尾(1992)、甘露(2004;2005)などがあり、これらの研究はいずれも感情形容詞述語文に課される人称制限の要因を、言語使用上の制約、認識論的要因、視点などさまざまな角度から考察している。

他に、彭(1994;2008)は日中対照というアプローチで日中両言語の感情表現の人称制限問題について詳しく記述している。他に、二重主語構文、比較構文などの特定構文における形容詞の考察、標準語と方言との比較研究など数多くの論究があるが、本稿とは直接関係しないので、ここでは紹介を割愛する。

1.2.2.2 形容詞の名詞修飾に関する研究

形容詞の名詞修飾を全体的に取り扱うものとして、宮島(1995)と森田(2002)が挙げられる。

宮島(1995)

宮島(1995)は、まず、<形容詞+名詞>の「かたち」と「形式」、形容詞の位置、かざられ(=名詞)の構造、かざり(=形容詞)の構造などに言及し、さらに、「Aの~B[1]」という構造をよりどころに、形容詞と名詞との関係を「性質規定」「間接的性質規定」「対象についての規定」「性

[1] A、Bは名詞のことを指す。

質・気持のあらわれの規定」「気もち規定」「具体規定」「内容規定」「条件規定」「状況の具体化」の9つのタイプに分けている。具体的には下表のとおりである。

【表2】

形容詞と名詞との関係		用　例
性質規定		大きな人
間接的性質規定		手の大きな人
対象についての規定		（かれの）好きな本
性質・気持ちのあらわれの規定		無邪気な笑い声、嫌な顔
気持ち規定		さびしい人、酒の好きな人
具体規定	客観的	白い色
	主観的	白い感じ、嫌な気もち
内容規定		自分の達者な保証を自分で与へながら
条件規定		利子は少ない代りに
状況の具体化		（かれの）若い時

森田（2002）

森田（2002）は、「AハBガ形容詞」構文を、「形容詞い＋B」形式に転換して、修飾語である形容詞と被修飾語である名詞Bとの間の意味関係をまず「様態修飾」「内容修飾」「感覚修飾」のように三大別した。さらに、「様態修飾」を、「対象が外との関係で帯びる属性」「対象がそれ自体（内）帯びる属性」とに分けている。そのうち、「対象がそれ自体（内）帯びる属性」に分類される例の範囲が最も広く、「属性修飾」「結果修飾」「程度修飾」「動作修飾」からなっている。

森田（2002）の分類は、表3のようにまとめることができる。

【表3】

形容詞とBとの意味関係			用　例
様態修飾	対象が外との関係で帯びる属性	相対的属性修飾	私にない才能、彼にふさわしい連れ合い、部屋に似つかわしい調度
	対象がそれ自体（内）帯びる属性	属性修飾	黒い髪、甘い菓子、明るい顔
		結果修飾	華々しい成果、みっともない失敗
		程度修飾	大きい地震、小さいミス、ひどい仕打ち、ひどい乾燥、えらい寒さ、激しい気象変化
		動作修飾	甘い誘い、軽い解釈、遅い歩み、めまぐるしい動き、子供っぽいふるまい、苦しい息の下から
内容修飾	外の対象に対して抱く主体の心		恋しい母、悲しい話、嬉しい報せ、恥ずかしい行い、楽しい休日
感覚修飾	内の対象から引き起こされる主体の心		痛い歯

形容詞の名詞修飾に関しては、宮島（1995）、森田（2002）以外に、仁田（1980）、寺村（1991）、一井（1997）、丹保（1997）、神崎（1999）、木下（2005）なども見られるが、いずれも形容詞の連体修飾に関する個別的な記述である。

仁田（1980）、寺村（1991）、木下（2005）

仁田（1980）、寺村（1991）、木下（2005）は主として一般の形容詞が持つ連体用法を持たない「特殊形容詞」の「多い / 少ない」のような（「遠い / 近い」を含む場合もあるが）の連体用法について考察したものである。仁田（1980）は意味論的要因に根拠を求め、一般の形容詞は名詞が内包している性質、属性の一つで名詞を限定するのに対し、「多い / 少ない」「遠い / 近い」は数、物理的距離という外在的（外延的）なあり方を示すため、一般の形容詞の連体用法を持たないと述べる。寺村（1991）は、一般の形容詞が他の同種のものと比較した上での特徴を述べる機能を果たすが（いわゆる「範囲限定の品定め」）、「多い / 少ない」はたんに事物の存在を表すので、一般的な連体修飾用法を持たないと主張する。また、「多い / 少

ない」の前に「最も／次に」など何か限定する語が付くと、その連体用法が自然になると述べている。木下（2005）は「遠い」も含み、「多い」「遠い」の装定用法を取りあげ、遠近・多寡の判断の際、比較対象の存在の明示が必要であると結論付けている。

一井（1997）

一井（1997）は、形容詞の装定用法を「描写」と「限定」とに分ける。「描写」か「限定」かの相違をもたらす要因は、主として主名詞の具体性・実際性にあるとする。そして、「描写」「限定」それぞれの場合、タ形への言い換えが可能かどうかについても触れている。

丹保（1997）

丹保（1997）は、「高い」「広い」「寂しい」三つの形容詞を例に、連体、連用、終止用法の出現頻度を提示し、各用法の出現頻度の相違は形容詞の語義の性格に深くかかわるという結論づけている。

神崎（1999）

神崎（1999）は、連体用法の下で、形容詞と「名詞＋の」の意味的な共通性を被修飾名詞との関係から分析し、被修飾語が＜感情＞＜状態＞＜性質＞などを表す場合は形容詞が多く出現するのに対し、被修飾語が＜観点＞＜範囲＞＜意見、発言＞などを表す場合は「名詞＋の」で具体的な内容を表すことが多く、形容詞の場合、名詞に形容詞性接尾辞「的」のついた形で、すなわちナ形容詞で具体的な内容を表すことが明らかになった。

1.2.2.3　宮島（1995）、森田（2002）の問題点

宮島（1995）と森田（2002）は、形容詞と名詞とのむすびつき全体を対象に、意味関係に基づいてグループ分けするものとして、本研究にとって貴重な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com